

成人学生に対する学習コミュニティ構築を目的とした 学生同士の学び合いに関する実態調査

A survey on university students' learning from each other at all study centers nationwide at the Open University of Japan

辻 靖彦, 芝崎 順司
Yasuhiko TSUJI, Junji SHIBASAKI
放送大学 教養学部
Faculty of Liberal Arts, The Open University of Japan
E-mail: tsuji@ouj.ac.jp

あらまし: 放送大学では 2017 年度に作成されたアクションプランの中でリメディアル教育の充実と学生同士の学び合いの促進を重要課題として掲げている。その目的のために本稿では、対面環境における学生同士の学び合いの現状を把握するために、全国 50 箇所の学習センターを対象にアンケート調査を行った。その結果、回答したセンターの 35.1%において学生同士が学び合い支援するサークルやボランティアグループが存在することが分かった。更にその中から選択した 4 つの学習センターに対して訪問によるインタビュー調査を行った所、以下の特徴が明らかになった：(1) 数学や英語など特定の内容を学生同士で学ぶサークルでは指導も可能なリーダー的な少数の学生が大きく貢献している、(2) 面積が大きい県にあり在籍学生がそれほど多くない学習センターにおいては学生同士のサポートの制度やサークルは存在していても相談に来る学生があまりいない、(3) 学生同士のサポートを行っている学生は情報共有等のために横の繋がりを欲している。

キーワード: 学生同士の学び合い, リメディアル, 学習コミュニティ, 学習サークル, チュータ

1. はじめに

文部科学省の中央教育審議会（2008）では大学の機能別分化を提唱しており、大学・短期大学・高等専門学校が学校種ごとにそれぞれの位置付けや期待される役割・機能を十分に踏まえた教育や研究を展開すると共に、各機関が個性・特色の明確化を図り、その特性を活かして一層の多様性を確保することが重要としている。

そのような状況のもと、放送大学では 2017 年に新学長より提示されたアクションプラン⁽¹⁾の中で、リメディアル教育の充実と学生同士の学び合いの促進が重要課題として示されている。

2018 年現在、放送大学には学部と大学院合わせて約 87000 人の学生がおり、学生は全国 50 か所にあるいずれかの学習センターに所属している。学習センターは各都道府県に少なくとも 1 つ存在する。このように全国各地に学生が分散している点からも学生同士の学び合いを促進させるにはオンラインと、オフラインである対面環境の双方から適切な支援方法を模索する必要があると考えられる。対面環境である各学習センターには様々なサークルや学生会等が存在しており、その中で理数系科目や英語など、リメディアル教育に相当する内容を学生同士と一緒に学び合う形式のサークルや、学生の学び方そのものをサポートするボランティアグループ等も存在している。そのような特徴的なサークルや取り組みは弊学の広報誌⁽²⁾でも紹介されている。

しかし、実際に全ての学習センターの中でどのくらいのセンターにそのようなサークルが存在するの

か、そして具体的にどのような活動を行っているのかといった俯瞰的な状況や活動の実態は明らかになっていない。

そこで本稿では、全学的な学生同士の学び合いをいかに促進させるか、その方略を検討するための第一段階として、各学習センターを対象に学生同士の学び合いに関する実態調査を行った。

2. 学生同士の学び合いに関する実態調査

2.1 アンケート調査

初めに全国の学習センターを対象に質問紙調査を行った。その概要を以下に示す。

目的 各学習センターにおける学生同士の教え合いや学び合いの実態を明らかにするため

期間 2018 年 2 月 10 日～3 月 9 日

対象 50 箇所の学習センターの所長先生

方法 Web アンケートによる自由記述形式

調査項目

- 学び直しや学び方を支援するサークルやボランティアグループの有無
- その他、学習と関連する取り組み
- そのようなサークル等に対する学習センターの支援内容

2.2 回答結果

回答結果を表 1 に示す。これより、回収率は 74.0% (37/50) であり、回答した機関の 35.1% (13/37) のセンターにおいて学生同士が学び合う、もしくは学習に関するサークルやボランティアグループが存在することが分かった。具体的には、英語関係のサー

クルが最も多く7機関、学び方や学習に関する相談をするサークルやグループが6機関、卒業論文や修士論文に関する支援や交流を行うサークルが3機関、数学を学ぶサークルが2機関であった。

その一方で、パソコンサークルや年に数回程度の単発型の講習会やイベント、そして講師を派遣する形式の課外授業など上記以外の学習に関するサークルや取り組みを行っている機関は29.7% (11機関)であった。そしてこれらのいずれのサークルやグループも存在しないと回答した機関は35.1% (13機関)であった。

表1 学び直しや学習を支援するサークル等の有無

回答	詳細	回答数(N=37)
学生同士が教え合い・学び合うサークルやグループが存在	数学	2
	英語	7
	学び方・学習支援	6
	卒論・修論支援	3
	合計	13
上記以外のサークルや取り組みが存在		11
いずれのサークルも無し		13

2.3 訪問によるインタビュー調査

前節の回答結果より、学生同士が学び合うサークル等における具体的な取り組み状況、課題、ニーズを明確化することで今後の効果的な学生コミュニティの構築に繋がる可能性が考えられる。

そこで、前節にて「学生同士が教え合い・学び合うサークルやグループが存在する」とみなした13機関から特に先進的な取り組みやサークルが存在する4機関を選定し、訪問によるインタビュー調査を行った。以下、調査の概要を示す。

目的 特に先進的な取り組みを行っている学習センター及びサークル等に対して具体的な現状、課題、要望を明らかにするため

期間 2018年3月13日～3月31日 (4日間)

対象 4つの学習センター (A, B, C, D とする) の所長先生およびサークル代表者またはグループメンバー

方法 半構造化インタビュー

調査項目

- 学習センターの支援体制、課題、考え方、本部への要望
- サークルやグループ等の活動状況、メンバー、課題、ニーズ、大学への要望

ここで、4センターの特徴及び対象者について簡潔に述べる。

A 学習センター

A 学習センター (以下、A とする) は中部地方にある学習センターであり、所属学生数は約3200名である。2.1節のアンケートでは数学サークル、英語サークル、プログラミングサークルが存在すると回答していたのでその3サークルの代表者と所長先生にインタビューを行った。

B 学習センター

B 学習センター (以下、B) も中部地方にある学習センターであり、所属学生数が約1200名である。B 学習センターにはボランティアのナビゲーターが行う学生相談制度があり、所長先生及びナビゲーターの卒業生一名にインタビューを行った。

C 学習センター

C 学習センター (以下、C) は関西地方の都道府県にある学習センターであり、所属学生数は約4500名である。C 学習センターには数多くの学生サークルがあり、その中から数学、英語、パソコンサークルの学生3名と所長先生にインタビューを行った。

D 学習センター

D 学習センター (以下、D) は北陸地方にある学習センターであり、所属学生数は約1300名である。ピアサポートという学生支援サークルがあり、所長先生及びそのサークルメンバー3名にインタビューを行った。

2.4 インタビュー調査の結果

以下、訪問調査のインタビューの結果をまとめる。

- ① 数学や英語など特定の内容を学生同士で学ぶサークルでは指導も可能なリーダー的な少数の学生が大きく貢献している
 - ② 面積が大きい県にあり在籍学生がそれほど多くない学習センターにおいては学生同士のサポートの制度やサークルは存在していても相談に来る学生があまりいない
 - ③ 学生同士のサポートを行っている学生は情報共有等のために横の繋がりを欲している
- ①はAの数学と英語サークルおよびCの数学サークルのインタビュー結果が論拠になっている。②はB及びDの相談件数を基に記しており、③もBとDの学生のインタビュー結果を論拠としている。

3. 考察

2.4節の結果①より、学生同士が学び合う学習サークルはごく一部の学生のボランティア精神に基づく貢献によるところが大きく、持続性に課題があると考えられ、大学による交通費の支給など公的な支援が必要と考えられる。

結果②と③においてはBとDに所属している学生がなかなか学習センターに来ることができないという地理的な要因に基づく可能性が考えられる。この点においては、WebサイトやSNSなど、オンラインツールによる学生相談サービスの導入により解決できる可能性が考えられる。

参考文献

- (1) 放送大学: “Vision'17”, http://www.ouj.ac.jp/hp/gaiyo/action_plan.html (取得日: 2018年6月10日), (2017)
- (2) 放送大学: “広報誌 ON AIR”, <http://www.ouj.ac.jp/hp/gaiyo/onair.html> (取得日: 2018年6月11日), (2017)